

# トーマス・マンの『ブッデنبロック家の人びと』 における“fremd”概念について

川 戸 れい子

## —抄録—

トーマス・マンは、北独リューベックで生まれ、18歳の時、南独ミュンヘンに移る。北独と南独は歴史的、文化的に大きく異なる。ミュンヘンへ移った際、マンはかなり“fremd”な感覚（違和感）を覚えたであろう。彼の最初の長編『ブッデنبロック家の人々』にも、それが反映されていると考えられる。主要人物の一人、トーニの夫となるミュンヘン出身の男は、“fremd”の語と共に登場する。ミュンヘンでの結婚生活も“fremd”なものに満ちていた。だが一方で、ラトヴィアのリガから来た男（トーニの妹と結婚する）の描写には、“fremd”がない。マンにとって、どのような人間、どのような場所が“fremd”であるのかを、ドイツ人へのインタビューも行って論じる。

## はじめに

ドイツ語の形容詞“fremd”の意味は、一般的な独和辞典<sup>1)</sup>で「①よその；外来の，外国の；他国の；他人の。②未知の；〔見・聞き〕なれない；不案内な。③異質の；異種の」のようになっており、英語の“foreign”にあたると考えられるが、後者と比べると、やや否定的な含意が大きい。このことは双方の派生語“ein Fremder”と“a foreigner”を比較すると一層はっきりする。後者は「外国人」の意味であるが、現代ドイツ語で「外国人」は“ein Ausländer”であり、“ein Fremder”は「よその人」「異邦人」「他国者」

である。即ち“fremd”は自己とは帰属の異なる人や、馴染みのない土地、また異質性を感じる事物に対して用いられる語なのである。

ひるがえって、トーマス・マン (Thomas Mann) の作品には周囲の環境に対して“fremd”である人物が数多く登場する。またマン自身が、19歳の時に故郷リュベック (Lübeck, 北独) から南独ミュンヘン (München) へ居を移し、その後ナチスの手を逃れてスイスへ、そしてアメリカへ亡命、戦後ヨーロッパに戻るが、それはドイツではなくスイスであり、そこで生涯を終えている。謂わばマン自身が“ein Fremder”として生きたのである。そうしたマンの“fremd”概念とは如何なるものかを探ることは、マンのアイデンティティー意識を捉えるために有益であると考えられる。

そこで、マンの作家としての地位を不動のものとした作品『ブッデンブローク家の人々』(“Buddenbrooks”. 以下“Bb”と略記)を取り上げることにする。何故ならここには“fremd”概念にかかわる注目すべき記述が見られるからである。主要な登場人物の一人であるアントーニエ・ブッデンブロークが、故郷の北独の街(地名は明らかにされていないが、リュベックと考えられる<sup>2)</sup>)からミュンヘンへ嫁ぐのだが、この結婚が破綻し実家へ戻る。その時、兄トーマスがアントーニエに、“Es ist die Stadt (問題は街だよ)”<sup>3)</sup>と言い、それを肯定してアントーニエは、どれほどミュンヘンが自分に合わなかったかを縷々語る。アントーニエの夫となる人物が登場した時から、この人物の描写には“fremd”が用いられ、ミュンヘンに対する記述にも“fremd”及びその派生語が頻出する。ところが、二人の妹クララはラトヴィアのリガ (Riga) の牧師のもとに嫁ぐのだが、この牧師についての描写には全く“fremd”が見当たらない。ラトヴィアという遠隔の地から来た人物は“fremd”ではないのだ。

北ドイツと南ドイツでは、言語を初めとして文化的な差が極めて大きく、人心も異なることは周知の事実であり、筆者も留学時代などに、ドイツ人たちの口からそれを示す言葉を聞いたことがある。例えば筆者の留学先は南独のテュービンゲンであったが、そこで北独出身の学生が「僕はプロイセン人だから、ここではいじめられる」と言っていた。またベルリンでは「バイエ

ルン？バイエルンなんてドイツじゃない」という発言も聞いた。

今回、半年の研修の機会を得て、改めてドイツ人の持つ“fremd”感覚の調査を計画し、ボーフム・ルール大学外国語教育研究所日本語学科（Ruhr-Universität Bochum, Landesspracheninstitut, Japonicum. 以下 LSI-ヤポニクムと略記）の協力を得て、日本語コース受講者にインタビューを行った。ちなみに当研究所は、恵泉女学園大学でフィールドスタディを実施して以来、ドイツ短期フィールドスタディの受け入れ先であった。

また、リガ市を訪れて、その都市景観を実見することとした。景観はその地を“fremd”と感じさせる決定的要因の一つである。ヨーロッパでは一般に景観の経年変化が小さく、殊に旧市街では景観保存、建造物の修復が原則であるため、現在でも“Bb”の時代の景観に触れることを期待できるからである。

リューベックとミュンヘンに関しては、筆者は既に訪れた経験があり、その景観の差異を目にしている。リューベックが、ランドマークであるホルステン門（ユーロ導入以前には50マルク紙幣の図柄であった）やマリーエン教会が代表するバックシュタイン・ゴートイック<sup>4)</sup>の街であるのに対して、ミュンヘンはバロック様式が優っており、都市の規模を別にしても、両者の景観上の違いは歴然としている。また“Bb”で言及されている他の都市（アムステルダム、フランクフルト等）の景観についても、筆者は識っており、唯一リガのみが未知の土地であった。

注

- 1) R. シンチンゲル他：『現代独和辞典』。三修社，1980。
- 2) 川戸れい子：『トーマス・マンと二都』、『探究 ドイツの文学と言語』所収。東洋出版，1995。S. 146f。
- 3) Mann, Thomas: “Buddenbrooks”. 1975, Fischer Taschenbuch Verlag. S. 263

以下、本論における同書からの引用は Bb263のように表記する。

- 4) バックシュタインは煉瓦のこと。石材に恵まれないドイツ北部及びオラ

ング等の煉瓦を建材とするゴシック様式。

## 1. ドイツ・ハンザの街，リガ

### A. 歴史

「ハンザ同盟」の名で知られ（国家間条約が締結されていないため「同盟」の名称は不適切とされている）、中世から近世初めまでバルト海、北海に勢力を張ったドイツ商人組織の中心は、ほかでもないマンの故郷リューベックであった。現在のラトヴィア共和国の首都リガは、そのドイツ・ハンザの拠点の一つである。実は“Bb”で言及のある都市は、ハンザ商館が置かれていた（例：ロンドン）など、ほとんどがハンザの加盟都市（例：ハンブルク、ロストック）、または密接な関係にあった所（例：アムステルダム）である。例外としてニューヨークとヴァル・パライスの地名が現れるが、この二カ所は事情があって故郷を離れている人物たちの居所であり、他の人々の視野の外にあるということを表すためのものと考えられる。

“Bb”の舞台としていつ頃の時代が設定されているのか、つまりその時代のリガがどのような状況にあったのかを、まず見定めておく必要がある。 “Bb”の初版は1901年に出ている。また作中、先に上げたトーマスやアントーニエの祖母が、ナポレオン軍の占領を経験したと述べられていることから<sup>1)</sup>、時代設定は19世紀後半として差し支えあるまい。当時のリガはロシア帝国の支配下にあったものの、「ヨーロッパへの窓」として繁栄を享受していた。

そもそもリガはドイツ人が1201年に建設した都市であったから、以後、一定数のドイツ人が居住していた。リガのみならず他の都市や農村部にもドイツ系の人々がおおり、彼らはバルト・ドイツ人と呼ばれ、10世紀から断続的に行われたドイツ人の東方植民の結果である。19世紀にはもはやハンザの栄光はなかったが、ハンザ商人の末裔等バルト・ドイツ人はラトヴィアの地に根を下ろし、支配階層を形成していた。帝政ロシアのロシア化政策の下で、彼らはドイツとの結び付きをさらに強めようとする。後にまた述べるが“Bb”

にも、ブッデンブローク家の営む商会在、リガと取引関係を持っていたことが書かれている<sup>2)</sup>。

20世紀に入り第一次世界大戦時、ラトヴィアはドイツに占領されるが、1918年、独立を果す。第二次世界大戦で再び戦火に巻き込まれ、戦後、ソ連の一部となった。かなりの数のドイツ系の人々が、敗戦後のドイツへと追放された。

## B. 現状

こうした歴史を経て、現在のリガはどのような姿となっているのか、筆者は特にソ連時代の影響の大きいことを懸念しながらリガへ向った。

7月初めのリガ、ドイツ語は全くと言っていいほど通じない。街では時折ロシア語が聞こえる。リガはバルト地域で最もロシア系住民の比率が高いという統計通りである<sup>3)</sup>。しかし景観はまさしく西欧的、否、ドイツ的と言えるものであった。

まず都市の形態であるが、ダウガヴァ河に港がある。河口から幾分遡った所に港を設け、そこに都市を建設するというのは、バルト海沿岸のドイツ・ハンザ都市によく見られる。他ならぬリューベックもトラーヴェ河に港を有する。もっとも河としてはダウガヴァ河の方がかなり大きい。

河岸に程近く市庁舎（建物は現代のもの）がある。その東側が旧市街で、大聖堂を初め教会が幾つかあり（これらは2度の大战で損傷を受け、修復されたもの）、市壁の一部と「火薬塔」と呼ばれている市壁の塔が残る。「火薬塔」はやや小ぶりながら、リューベックのホルステン門の片方とも見える。大聖堂は基本的にはロマネスク様式だが、煉瓦造り、他の教会はバックシュタイン・ゴートシックである。旧市街にはかつてのドイツ商人の家が残されており、現在は博物館となっている。また河に近い建物の張り出した切妻屋根の下には、荷揚げ用の滑車が残り、これはやはりハンザの拠点であったベルゲン（ノルウェー）にも見られるものである。北欧的要素は、所々にある横板張り・切妻屋根の家屋にも見受けられる。さらに、旧市街を中心に多くの建物が Giebelhaus（破風屋根の家）で、この点はまさしくリューベック的と言えよう。加えて観光の目玉とされるユーゲントシュティール建築、こ

れがドイツ風でなくて何であろう。ただ一つ、ロシア正教の大寺院が金色燦然たる威容を見せている点だけが、ロシア＝ソ連支配の跡を示している。

如上、都市景観という点からすると、リガはドイツ的、ハンザ的である。今日でさえこのような景観を有するのであるから、19世紀後半、ハンザの歴史を共有し、相当数のドイツ系住民を擁したリガは、街を歩けばドイツ語も耳に入ったであろうし、リューベックの人々にとって、“fremd”な地、異郷などではなかったのではあるまいか。

注

- 1) Bb18
- 2) Bb31
- 3) 2004年12月31日 EU 統計局

## 2. 現代ドイツ人の“fremd”感覚—インタビューの試み

LSI-ヤポニクムの受講生に対して行ったインタビューの質問項目は以下の通りである。使用言語はドイツ語である。

Interview: Was finden Sie “fremd”?

(インタビュー：あなたは何を“fremd”と感じますか?)

1. Wann sind Sie geboren? (お生まれはいつでしょうか)
2. Wo sind Sie geboren? (どちらでお生まれになりましたか)
3. Wo haben Sie in Ihrer Schulzeit gelebt? (どこで義務教育をお受けになりましたか)
4. Welche Sprache ist Ihre erste Sprache? (あなたの第一言語は何語ですか)
- 5a. Sind Sie einmal im Ausland gewesen? (外国にいらっしゃったことがありますか)
- 5b. Sind Sie einmal in den anderen Ländern ausser Deutschland und Ihrer Heimat gewesen? (あなたの故国とドイツ以外の国にいらっ

しゃったことがありますか)

6. Welches von den Ländern, die Sie besucht haben, finden Sie persönlich am fremdesten? (あなたが行ったことのある国の中, どの国を自分の気持として最も“fremd”だと感じましたか)
7. Was finden Sie an dem Land fremd? (その国で何を“fremd”と感じましたか)
8. Welche deutsche Stadt, die Sie schon einmal besucht haben, finden Sie am fremdesten? (これまで行ったことのあるドイツのどの街を最も“fremd”と感じましたか)
9. Was finden Sie an der Stadt fremd? (その街で何を“fremd”と感じましたか)
10. Sind Sie zum ersten Mal in Bochum? (ボーフムにいらしたのは初めてですか)
11. Finden Sie Bochum fremd? (ボーフムを“fremd”だと思いますか)
12. Was finden Sie an Bochum fremd? (ボーフムの何を“fremd”だと思いますか)

インタビューの対象者は19歳から52歳の男女12名で、職業や出身地は様々であるが(ただし全員ドイツ国内の生まれ)、第一言語は全員ドイツ語であった。

第1例: 女性, 1976年生, 義務教育はドイツで。現在スイス在住。職業上全世界へ行く。

最も“fremd”なのは日本—文化, 伝統。ドイツの都市では Bochum が“fremd”—

都市景観と人々のメンタリティー。

第2例: 男性, 1988年, Köln 生。義務教育は Hagen で。現在は Bochum 在住。ヨーロッパ諸国に行ったことがある。最も“fremd”に感じたのはフランス—言語, 人間。ドイツの都市はあちこち行ったことがある。最も“fremd”に思うのはバイエルンのアクセント。

第3例: 女性, 1957年, Trier 生。義務教育も Trier。人類学を専門として

いるので、タイ、中南米に行ったことがある。日本とアメリカには居住経験も。“fremd”と感じたのは日本とタイ、殊にタイの貧困に印象を受けた。Bochum は少々“fremd”，あまり友好的な感じがしない。

第4例：男性，1980年，Kassel 生。義務教育も Kassel。ヨーロッパ諸国と日本，韓国に行ったことがある。最も“fremd”だったのは韓国—食べ物，旅行者に対する態度。見ず知らずの人に常に手を差し伸べようとする。ドイツの都市で“fremd”なのは Berlin と Weimar で，殊に Weimar の閉鎖性と保守的なところ。Bochum は別に“fremd”ではない。

第5例：女性，1981年，Saarland 生。義務教育も Saarland。イギリスとスペインには居住経験。旅行で行ったのはアメリカ，タイ，ラオス。最も“fremd”だったのはラオス—日常生活。ドイツで最も“fremd”なのは Hamburg—よく分らないがもしかすると海のせいかもしれない。Bochum は“fremd”ではない。

第6例：女性，1980年，Thüringen 生。義務教育も Thüringen。アメリカ，ジャマイカ，日本，中国に行ったことがある。最も“fremd”だったのは中国—コミュニケーション。ドイツでは Hamburg が“fremd”—雰囲気。Bochum は“fremd”というより“seltsam”。

第7例：男性，1979年，Berlin-Ost 生。義務教育も Berlin。ヨーロッパ諸国の他にはアメリカ，オーストラリア，ニュージーランド，日本に行ったことがある。最も“fremd”だったのは日本—文化，外観，人々の態度。ドイツでは München が最も“fremd”—言葉，衣服，人々の態度。Bochum は“fremd”ではない。

第8例：男性，1988年，Essen 生。義務教育もルール地域で。西欧諸国，地中海諸国，トルコ，日本には6ヶ月いた。最も“fremd”なのはフランス—人々のメンタリティー。ドイツの都市は“fremd”とは思わない，もちろん Bochum も。

第9例：女性，1983年，Baden-Württemberg 生。義務教育も同所。ヨー

ロッパ諸国とカナダ，日本，エジプト。最も“fremd”なのはエジプト—習慣，人々の態度，特に女性の情況。ドイツで“fremd”に思えるのは北ドイツ，例えば Lübeck。Bochum もやや“fremd”に感じる。

第10例：男性，1982年，Ludwigsburg 生。義務教育もその近くで。日本，中国，フィリピン，マレーシア，アメリカ等，特にギリシャによく行く。最も“fremd”だったのは中国—人々の態度，衛生状態の悪さ。ドイツでは Berlin—方言と都市の大きさ。Bochum は“fremd”—工業，古くて汚い建物。

第11例：男性，1979年，Stuttgart 生。義務教育はシュヴァルツヴァルトの小さな街で。フランス，イギリス，日本。最も“fremd”なのは日本—食べ物，人々が控えめなこと。ドイツでは“Giessen”—社会状況，貧しさ。Bochum は少々“fremd”—人々の直截なところ。

第12例：女性，1989年，Bochum 近郊生。義務教育は Bochum で。フランス，イギリス，日本。最も“fremd”なのは日本—メンタリティー。ドイツでは Dresden—建物が古くて汚い。

ドイツ人がアジアやエジプト等に“fremd”感を持つのは当然のことであろう。第2例の男性はフランスを最も“fremd”としているが，彼はヨーロッパ外の経験を持っていない（調査時。その後彼は日本に来た）。しかしドイツ内の都市についての結果は興味深い。

まず4名がボーフムに“fremd”なものを感じているが，筆者も初めて当地を訪れた時に違和感を覚えた。筆者は南独テュービンゲン（Baden-Württemberg）で留学生活をしており，謂わば南独の刷り込みを受けているのだが，ボーフムでの違和感の原因は都市景観にあるように思う。この点第1例と共通している。ボーフムは炭鉱を初めとする鉱工業都市として19世紀に大きな発展を遂げた為，独特の景観を有すると考えられる。

次に南独出身者の中2名がベルリンとリュベックを“fremd”とし，ベルリン出身者とルール地域出身の1名がそれぞれミュンヘンとバイエルンに

“fremd”感を持っている。これは筆者の意に適った結果であった（回答を誘導した覚えはない）。第5例はザールランド出身で、南独と言えるが、ハンブルクに対する“fremd”な感覚は北独に対するものというより、自ら述べている「海のせいかもしれない」というのが当たっていると思われる。このことは第6例にも当てはまるだろう。21世紀の現在もドイツの南北差は存在しているようだ。

第4例、第12例は旧西独出身者の旧東独地域に対する違和感を示す。戦後45年の分断は、ドイツに歴史的な南北の相異に加えて、東西の相異と格差をもたらした。今回は旧東独地域出身者が少なかったが、機会があればさらに対象を広げて調査してみたい。

### 3. 『ブッデンブローク家の人々』に観る“fremd”なミュンヘンと“fremd”でないリガ

本章では前の2つの章を受けて、“Bb”におけるミュンヘンとリガに関わる記述を考察する。“Bb”で最初にリガという地名が現れるのは、第1章、トーマスたちの祖父、老ブッデンブロークと父であり当主であるヨハンとの会話の中である（Bb31）。“Kapitän Kloot ist von Riga unterwegs……（クロート船長はリガから戻る途中だ）”この個所では、ブッデンブローク家の経営する商会がリガと取引があることが示される。ブッデンブローク家には長男トーマス、次男クリスティアン、長女アントーニエ、次女クララの4人の子どもがあるが、第1章では上の3人はまだ小学生であり、クララはまだ生まれていない（第2章冒頭でクララの誕生が描かれる）。やがて子どもたちはそれぞれ成人し、婚期を迎える。実は「はじめに」で触れたアントーニエの結婚は二度目であり、最初の結婚に破れたアントーニエは実家で暮しているが、裕福なブッデンブローク家には多数の訪問者があり、信仰深い母親は訪ねて来る牧師たちを家に逗留させる。そうした牧師の一人としてリガの牧師ティーブルティウスが登場する。“Dies war der Pastor Tiburtius, welcher aus Riga stammte, einige Jahre in Mitteldeutschland amtiert und nun, auf der Reise nach seiner Heimat, wo eine Predigerstelle ihm

zugefallen war, die Stadt berührte.……vorlas……mit seiner hohen, sich überschlagenden Stimme und in der drollig hüpfenden Aussprache seiner baltischen Heimat. (これがリガ出身のティーブルティウス牧師で、数年間中部ドイツに在職していたが、牧師として招聘されて故郷へと向う旅の途中、この街に立ち寄ったのであった……高い、裏返った声とバルト地方特有の飛び跳ねるようなおかしな発音で朗読した。Bb194)” ティーブルティウスは19歳のクララに求婚し、二人はりガへと旅立つ。上の引用に見るように、発音の癖は指摘されているが、特に“fremd”な点は描かれていない。またリガとドイツの教会の間に関係のあることも分る。

ところが、アントーニエの二度目の結婚の相手となるペルマネーダー氏と、彼の住む街ミュンヘンの場合は違う。アントーニエは女学校時代の友人の招きでミュンヘンに旅行し、そこでペルマネーダー氏に出会うのだが、ミュンヘンから故郷へ手紙を書く。「ミュンヘンはとでも気に入っています (Bb209)」と書きながらも食べ物に慣れないことなどを上げ、“man befindet sich eben in einem fremden Lande (異郷にいるのですから Bb210)”と言う。そして「問題はカトリックです (Bb210)」とする。ミュンヘンはドイツのカトリックの中心地であるが、一方のリューベックは圧倒的にルター派が優勢で、ブッデンブローク家の信仰もルター派である。初めてのミュンヘン行きがアントーニエに二度目の結婚をもたらす。

アントーニエがミュンヘンから戻ってほぼ1ヶ月、“der fremde Herr (見知らぬ紳士 Bb209)”がブッデンブローク家を訪れた。これがアントーニエの二人目の夫となるペルマネーダー氏である。この人物は話す言葉といい、服装といい風変わりである。彼に対しては“fremd”が次々と用いられる。“der fremden Erscheinung des Gastes (見慣れない客の姿 Bb224)”, “solche verdrossen behagliche Formlosigkeit des Benehmens war ihnen fremd (不機嫌なのだかくつろいでいるのだから分らないこういう型破りな態度は馴染めないものだった Bb226)”。ペルマネーダー氏はしばらくブッデンブローク家に滞在し、婚約が成立した。数ヶ月後アントーニエはミュンヘンでの暮しに入る。“Aber im grossen und ganzen blieb sie stets eine

Fremde in ihrer neuen Heimat (だが彼女は新しい故郷で全くの異邦人であり続けた Bb250)”し, “Übrigens war es nicht diese Formlosigkeit und dieser geringe Sinn für Distanz allein, was ihr fremd und unsympathisch blieb (彼女が馴染めず共感を持ってなかったのは, ミュンヘンの人々の無作法さや, 距離というものに無頓着な点だけではなかった Bb251)”。この結婚も長くは続かない。彼女の持参金を手にした夫が引退してしまい, アントーニエを大いに落胆させ, あげくに夫は女中に手を出す。これが表向きの離婚の原因となり, アントーニエは傷心を抱いて実家に戻る。

彼女を宥めようとする兄トーマスに対して彼女は言う。“in einer Stadt auszuhalten (あんな街で我慢して Bb262)” いることこそ沽券にかかわると。それに次いで先に触れた個所がある。“Es ist gar nicht der Mann. Es ist die Stadt. (問題は君の夫じゃない。問題は街だよ Bb263)”。これをきっかけにアントーニエは堰を切ったように語りだす。“Das hat meinen Entschluss, von München auf und davon zu gehen,……denn ich kann dort unten nicht leben,……Wie eine Pflanze,……die in fremdes Erdreich verpflanzt werden (ミュンヘンから逃げ出そうという決心をさせたの, ……あの南の方じゃ暮せないのよ……馴れない土地に移植された植物みたいなものなの Bb263)”そして“aber in fremderes Erdreich konnte ich nicht kommen, und lieber ginge ich die Türkei! Oh, wir sollten niemals fortgehen, wir hier oben! Wir sollten an unserer Seebucht bleiben (でもね, あれくらい慣れない土地はなかったわ, あそこへ行くくらいならトルコへでも行くほうがましよ! ああ, この北方に住んでいる私たちは絶対行ってはいけないのよ! 私たちはこの入り江のほとりに居るべきなの Bb264)”。問題は街であった, 土地であったのだ。“fremd”な土地は場合によっては耐え難いものなのである。

おわりに

前章はリューベックに生まれ育ったアントーニエにとって, 南独ミュンヘンは耐え難く“fremd”であり, それが彼女の人生を変えさせたことを明

らかにした。アントーニエをして、ミュンヘンを逃げ出させた“fremd”なるものは何であったのか。言葉、食べ物、人と人との距離感—南独（オーストリアを含む）の人々は *gastfreundlich* と言われる。客人に対して親切というほどの意味だが、これが北独の人の目には、狎れ狎れしさ、余計なお節介と映る。反対に南独人は北独人を冷たいと感じる。また景観の差異—バロックのミュンヘンとバックシュタイン・ゴータイクのリュューベック。カトリックの南独とプロテスタント（ルター派）の北独。今回は取り上げなかったが、Bbにはこの宗派の違いに関わる記述も少なくない。そしてリガ、バックシュタイン・ゴータイクと破風屋根の街、ルター派の街。

リュューベックから観てリガは“fremd”ではない。どちらもバルト海沿岸の「入り江のほとり」の街である。そして両者とも「北方の」街。前章で引用した Bb264の“hier oben”，日本語として通じさせる為に「この北方」と訳したが、直訳すれば「ここ、上の方」で、ミュンヘンを指す“dort unten（あちら、下の方）”と対を成す。この対はマンの『魔の山』にも現れる。このことには大きな意味があると考え。カトリックとプロテスタントの関係とともにさらに考究していきたい。